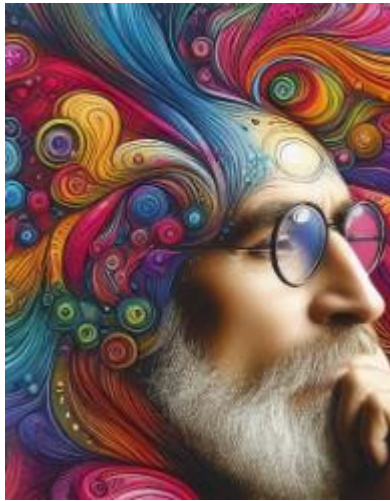


アルマ



サンクライター・マガ
ジン 2025年6月号

フィリペ・アレクサンドル・デ・アンドラーデ・
サ・モウラ Filipe@FilipeMoura.com 駿空ラ
イター運動

#SunKuWriter

空虚な夜、
魂が静寂にこだまする、私の
中の空虚。

思考が渦巻き、居場所のない
空気が閉じ込められ、息が詰
まるまで呼吸をする。

時間も場所もなく、影で待ち
、光も空気もなく存在してい
る。

カモフラージュされた外見の影で、私は塗りつぶされ、本当に変質してしまう。意識するこ
となく、私は音の深層心理の中に身を置く。

バラバラになったアイデアは霧のように蒸発する。人生は流れ、透明で、メッセンジャーは
いない...ただ私が、私自身とともにいる。

影が秘密をささやき、冷たい月が暖め
る。

言葉は空しく、あてもなく、響きもなく踊る。宛先のないルーズな手紙は、夢を書くこ
とを忘れたペンの私のようなだ。

私は読まずに書く。言葉は破れた紙の魔法の中で踊る。光と影が絡み合い、インクの中
に秘密が隠されている。

インクの夢、薄れゆく記憶、落ち着かないアイデアのぼかし。形のない落書き、心の踊
りで失われた痕跡。

保存された記憶、現在に生
まれ変わる、埋もれた未来
。

私はイメージのない鏡であり、魂が壊れている。自分を見るとき、私は鏡の中でバラバラに

なる。

煙が宙を舞い、思考が巡り
、こだまがつぶやく。

詩人は書かず、涙が言葉となり
、沈黙が語る。

魂は目には見えないが、心で感じる。誰にも聞こえない秘密をささやく
、
おそらく魂は、私たちが何であるかの反響にすぎないからだ。

時の線路の上を、私は微笑
みながら逆走する。

私は私が感じるものであり、意味などない。おそらく、意味などまったくなく、ただ逆ギア、
虚無への逃避なのだろう。静寂の中で、言葉は私の避難所であり、ゆるやかで、縛られていない。

時々、私は失われた宇宙であり、星のない夜であり、隠れた月である。私は闇の中に逃げ込む。誰も私を見つけることはできないが、もしかしたら彼らが私を発見してくれるかもしれない。

私の叫び声は私自身のものではなく、私の心の中で踊る声の反響なのだ。誰にも聞こえない静寂の中、私の心の中で大声で叫びながら、私を突き刺す。

渦巻く時間、それを重く
する過去はなく、現在が
滑り落ちていく。

その言葉が風であり、翼もなく、目的
地もないように、
無限の中に迷い込んだひとつの思い。

私の影は私を照らし、詳細のない光、つかの間の反射。存在しないように見えることもあるが、いつもそこにあり、陽光の中で踊っている。

書かない言葉は私を窒息させる、
読まれることはないが、私の心の中で踊っている。韻を踏まない
詩が、何も考えずに頭の中で。

夜の静寂の中で、
心のこだまが踊り、言葉に
命が宿る。

世界は私たちが夢見ながら書かない詩である。私は、言葉なしで文字が踊る宇宙に住んでいる。

文字の宇宙で、言葉は踊り、愛に包ま
れる。ソネットが生まれる。

泣き叫ぶ魂はピアノの上
で、痛みとメロディーと
愛を響かせる。

虚しさが胸に響く、
闇に舞う姿、私は月のない夜。

魂の薄闇の中で、光は静け
さを失っている。憂鬱の中
で、あなたの導きの星だけ
が輝いている。

静寂は群衆の中で叫び、声は方
向なくこだまする。夜の言葉、
闇の中の真実。

言葉は私の皮膚、文字は私の血液。紙は私の呼吸する宇宙。書かなければ、私は空っぽ、無に等しい。

黄昏時、私は踊る光、抱擁する囁き。狂気と存在の重さの間で、私は無限を書く。

私はペンを持つ狂人、
空想は踊り、自由になる。紙は消耗し、インクは滴る、
心の涙を燃やす。

書かなければ、私は時の中の影となる。言葉が死に、沈黙が私を重くする。文字の中だけで私は呼吸する。

一語一語が鼓動であり、一文一文が私の呼吸する空気だ。文字がなければ、私は虚無の中に崩れ落ちる。

語る表情、過ぎ去る年月、
重くのしかかる感情。

嘘をつく心、視線を貫く心、
そこで私は時々死ぬ。

雫が宇宙へと変わる執筆の海で、私はサイレンの歌を歌う歌詞に難破する。催眠術にかけられ、私は果てしない詩の中に沈んでいく。

私の旅は港のない船、海を選ぶ難破船だ。航海することは生きることであり、世界を駆け巡ることは夢を見ることだ。

魂を研ぎ澄ます人のように、私はインクを用意する。私の血、私の言葉、終わりのない文章で繰り広げられる戦争。決して勝つことはないが、私は進み続ける。

思考の空虚さの中で、私は自分自身を見失う、

私の避難所ではない場所で。

想像の彼方、静寂は友である。

時間の中で迷い、空間の中で見
つける。

私は私が感じるすべてのものであるが、私は文章を形成するのを待って踊っている緩い
言葉の中に私自身を空にする...意味？カオスの中だけかもしれない。

思考が失われた広大な空虚の中で、私は空間で踊るアイデアの間に宙吊りになっている
自分に気づく。

静寂の中の心、
閉じこめられた空気の中で、
息もなく。愛？風の中だけ。

言葉は逃げ、虚空で踊る。私のものでも、あなたのものでもない、風のものだ。そのリズム
の中で、私は空気に溶けていく言葉に我を忘れる。

私は自由だが、自由に縛られ、縛られた運
命を背負い、私自身の不幸、私の運命を背負
う。

血管からインクが出る、
空の紙の上で踊る、芸術が生
まれる。

海のように流れる思考、単純と複雑の間で踊る言葉。理由のないフレーズ、しかし魂の
こもったフレーズ。

言葉は混沌の中で踊り、衝突し、私が捕まえる前に逃げていく。私は彼らに翼を求めたが、彼
らが私に残してくれたのは沈黙だけだった。

芸術の中で、私はあなたを
愛したいと思い、遠い空を

飛んだ。

私は魂の断崖絶壁を飛び越え、落下の狂気を受け入れた。落ちたとき、私は二度と立ち上がれなかった。衝撃のエコーと眩暈だけが、私に付き合ってくれた。

孤独よ、私に手を差し伸べなさい。あなたは結合によって切り離された兄弟だが、魂にはいつも残っていた。

魂に刻まれた傷跡が、存在
を打ちのめす。夜が照らす
。

あなたのまなざしの中に、愛の海がある。あなたに会いたくて、船から飛び降り、沈んだ。泳いでも、泳いでも、あなたを見つけられなかった。

インクに染まり、言葉は混沌の中で踊る。静寂がこだまし、私のかげらが溶けていく。

私は沈黙の声、文字がこだます
る叫び、疎外されたノイズ。

私は魂が隠していたものを言葉から盗んだ。私は言葉から意味を剥ぎ取り、重みを引き剥がした。私とその痛みを探したとき、それは太陽に照らされた影のように逃げ去った。
。

私は言葉を引き裂いた、
むき出しの肌、魂から溢れ出
る感情。

思考は魂を打つハンマーだ。流れに任せるが、その前後が重くのしかかる。感情？ただの...感情だ。

思考は散り、雲は青空を横切
り、私は神に出会う。

私はただの指揮者、インクは紙に注ぐ魂。書くことに義務があるかどうかはわからないが、私はそれに従う。

言葉は宙を舞い、星と踊る！月の光が愛を照らす。ただ存在し、観察し、書く...そして静寂が起こる。

詩人の魂、燃える痛み、人生の中で目覚める、頑固な苦悩。縛りは解け、自由に呼吸する、
生きていない息苦しさ、詩が鼓舞する。

孤独な思考の流れは、私をひとつの思考の空虚さへと導く。沈黙そのものよりも孤独だ。

私の中の空虚、私の中の充満。息を吸い、吐く。サイクルが踊り、胸が歌い、静寂が叫ぶ。
。

ペンは紙の上を踊り、浮き沈みし、傷に命を吹き込む。存在と感情のはかない瞬間、そこで起こることが強調される。

私は剣を振るのようにペンを持ち、静寂を切り裂く準備をする。その瞬間、私はタバコに火をつけ、真っ白なページをまた一筆書く準備をする。

私が書く言葉のひとつひとつが、私の胸の怒りを運んでくる。私の魂に閉じ込められた物語は、紙でさえも解放することができない。

憎しみと愛、毒と傷。

歓迎も突き放すことも、終わりは見えない。

詩人は常に正しい、愛において
彼らは純粋な感情である。
理性？心の中だけだ。

今日も私は言葉に寄り添い、静寂を作り出す、

フレーズの心地よさの中で眠りに落ちる。

時が別れを告げる人生の岐路で、私たちは計り知れない虚しさを見つける。諦めることは弱さではなく、宇宙とともに流れる術なのだ。

憧れとは、不可能の海を航海する、失われた船である。盲目の私は欲望の風を追う。

空のレールの上を、孤独に結ばれて、彼らは行く。心はむなしく。

神秘への旅路、秘密の不在は、水平線に踊る夕日のようにシンプルで複雑な姿を現す。

言葉は沈黙のこだまであり、口は秘密にするが、心は風に向かって叫ぶ。

恐怖の眩暈の中で、沈黙の中に隠された栄光、火のない炎。
。

疲れたペン、紙に涙を残し、インクが沈黙する。

魂の空虚、群衆の沈黙、孤独であり孤独でない。

言葉だけが沈黙の重みを知っている。私はあなたのために書いたが、結局は私の中に残る孤独のために書いた。

私は言葉を、軽い詩を息に乗せて運ぶ、

詩は飛ぶ。

言葉の中で、私は魂が静かに保ち、心が保つ秘密を解き明かす。涙の海の中で、私は言葉の中に飛び込み、深みで自分自身を見つける。

私は魂の中で詩を書く、孤独は私をなだめ、仲間は黙っていない。

私が立ち止まると、沈黙が語りかけた。ペンを手に、虚しさを紙の上に。言葉は消え、本質だけが残った。

私は時を駆け抜け、言葉は踊り、止まることなく書き続ける。時間は逃げるが、私はそれを捕まえるために書く。

書くという錬金術の雲の間で、あなたは生き、感じる。ペンを手にして初めて、魔法が起こる。

空虚と音の間で、私は自分を見つけてくれる言葉に我を忘れる。ああ、書かれたものの響きはなんと甘美なのだろう。

書くことで、私は自分を見失う、魂の中で私はついに自分自身を見つける。

言葉がないとき、暗闇が私を包み込む。
言葉の力、通り抜ける光。

感じること、そして見ないこと、
隠された謎を見つめ、物事は歪む。

人生の曲線の中で、運命は戯れる。目が交差し、言葉がぶつかり合う。一瞬と無限の間で、私たちは自分自身の事故である。

冷たい静寂の中で
魂は詩で叫び、心は囚われる
。

言葉は鎖につながれているが、空を飛ぶ。読む人のために書かれ、心を自由にする。

風の息吹の中で、視線は時を凍らせる。

時間はパラドックスである。しかし、その瞬間は私たちから逃げていく。

書くことは、生き残ることなく生きること
であり、おとぎ話のような飛行である。
それは時間の中に隠れ、言葉
の中に見出される。

愛は炎である、
それは暖め、また燃やす。痛みは魂に
残る。

言葉に目を奪われ、私は世界を見る。私はそ
れを書き留め、その深みに我を忘れる。明晰
さに酔いしれ、深い静寂に包まれる。

今に閉じこもり、文章を空
中に放ち、穏やかに脈打つ
。

悲しみをどう言葉にする？書くことはできない。それはすでに経験した痛みや苦悩の
中に隠れている。

人生の海、広大な青い希望
の中で、悲しみは希薄にな
る。

言葉は静かに待機し、悲しみも死もな
い。

言葉の中の感情、一瞬の中の宇宙。

言葉は心の中の種のようなもので、時間をかけて発芽する。私たちは適切なものを探
すが、その瞬間はつかの間だ。最後にはいつも、言い残されたことを叫ぶ沈黙がある
。

無限からの声が響き、叫びが目覚める。現実がささやく、聞こえるか？

感情は言葉であり、時間に残された
印であり、記録された人生である。

言葉の静寂の中で、言葉を読まない
者はそれを感じない。しかし、私た
ちは言葉の中を旅する。

霧の中を、
夜と欲望は踊り、私は遠くで
瞑想する。

感じることは生きること、
五感が巡り、魂が振動する

。

私はひとり、
静寂が叫ぶ。

私の存在の中心で、苦く
希薄な私は浮遊し、私の
魂は潜る。

存在の静寂の中で、孤独な使命
が立ち上がり、虚空にこだます
る。

星が踊る、
星は舞い、雲はさっと過ぎ去り、す
べては儚い。

私はここにいて、存在に絡め取られ、ただ存在して
いる。暗闇の中で、私は明晰さを見出す、
日陰になればなるほど、冷静さが増す。
静寂の中で魂が踊る。

自分を見つめ、書く。コンマ
とフルストップで、私は構築
し、破壊し、断崖絶壁で生ま
れ変わる。
私の叫びは、再び構築すること。

それは私であり、ただ私であり、私でないすべての私である私なしで。すべてと無の間で、
私は通り過ぎる風だ。

地平線を見て思う...あなたはここにいる。本当だ、君はここにいる。夜明けの静寂の中
、あなたは確かに存在している。

忘れてしまった...しかし、忘れるということは、すべてを思い出す必要がないというこ
とを思い出させるだけなのかもしれない。

重い思考、
魂が泣いている。

あなたを感じることは、風と踊るようなもの。触れずに、でも魂は渦巻いている。

走って、走って、迷って。ただ走りたい、目的地もなく飛びたい。自由は私の足音で踊る。

書くことは振動する、
文字が、巨大な、言葉の踊り
の中を飛び交う。

心は何度つまずき、それでも踊ろうとするのか？考えること、それは奇妙な行為だ、
考えることは奇妙な行為だ、
あるいは、ただ存在することについて考えること？

奇妙とは、私たちを取り囲むもので
あり、目には見えないが、とても明
瞭で、私たちを包み込む奇妙さであ
る。

意志なく命令され、心は縛られ、魂は沈黙
する。自由よ、あなたはどこに守られてい
るのか？

永遠の命、生き続け
ること。決して空っ
ぽではない、
私たちの魂はいつも思い出でいっぱい
いだ。

私はアイデアを混ぜ合
わせ、薄め、分け、再
び世界を創造する。

創造の芸術では、毎日が新しい白紙のキャンバスだ。創造し、再創造し、また創造する ...
それは想像力の無限のダンスだ！

創造とは、世界に満ちた空虚である、

想像力は静寂の響きである。

メランコリックな運命、
時間によって背負われた重荷、救い
のない呼吸。

幻想は人生の筆であり、真実はキャンバスである。描けば描くほど、道は開ける。

思考に吸収され、押しつぶされ、
引き裂かれ、私は強く生まれ変わる。
る。

思考は踊り、視線は時間に囚
われ、永遠の記憶となる。

空間に迷い込み、空間は計り
知れないが、私には地面がない。
い。

不在の私はさまよう。虚
空の中で自分を探し、こ
だまの中で自分を見失う
。

風と踊る人のように、私は言葉の間をさまよう。私は正しい言葉に寄りかかり、一息で自分を解放する。

想像と現実のイマジネーションの間には、飛行がある。飛行の感覚を存分に味わいながら飛ぶことは、私たちを高揚させる芸術である。

湧き出ることなく固まり、注がれるこの液体...魂の中を流れる神秘。

あらゆる瞬間に生まれ変わり、時間は私たちを惑わすが、私たちは前進する。

脈打つ命の風の中をさまよう。

喜びと不満、満足しても虚しい。

生きること、矛盾。

魂は踊り、影は抱擁し、軽さと重さは
完全に優美に。太陽である存在、過ぎ
去る存在。

舞う風、
落ち着かない心が出会う、進む
光。

輝く光、
自らを現す存在、永遠。魂の
反映。

言葉が紡ぎ、思考が踊る。思考の逆もまた詩である。

言葉は踊る、
魅惑する詩の中で、魔法が立
ち昇る。

空気に漂う悲しみ、
自由の翼は去り、心に還る
。